

2011.4.19.

<再度、ボート転覆事故について調べて頂きたい事>

西野 敬

Q1 三ヶ日青年の家の運営自体が県から民へ変わったその影響について、どのような調査をしましたか。(変更点がないという認識に至るまでに、どのような調査をしましたか。)あるいは、所員の「問題なく実施しています」のことばだけで、全く調査をしなかったのでしょうか。

A1 三ヶ日青年の家の運営主体が民間に委託された影響については、特別な調査をしておりません。

平成21年6月1日に22年度の予約をした際に、当時の所員(静岡県職員)から、「来年度、指定管理者に変わるが、引き継ぎを確実にし、これまでと変わらない運営・指導体制で実施できるので、心配はありません。」との発言がありました。学校としては、口頭ではありますが、民間委託に関して静岡県が責任をもって引き継ぎをするとの確約を得たものと認識し、指定管理者への変更について、疑いを持つことはありませんでした。

4月に行った下見の際も、新しい所員から同様の説明を受け、県から民間への引き継ぎが確実に行われていると認識し、この段階においても、特別な調査はしませんでした。

Q2 どうしてカッターが「避難用だから安全です」の所員の言葉だけで、納得したのか、どうしても理解できません。大丈夫だと思った、その根拠は何でしょうか。

転覆するかもしれないという認識は全くなかったのでしょうか。所員が安全です、と言ったからでは、回答になっていないと思うのですが、その点は如何でしょうか。

A2 所員からの「避難用だから安全です。」という言葉だけで納得したわけではありませ

ん。

三ヶ日青年の家のカッター訓練は、小学校高学年からから大人までを対象とした活動として長年の実績があり、そのノウハウは確実に引き継がれているという認識、昨年度も章南中学校が実施していたこと、また、下見の際にカッターボートを実際に見て、カッターボートが大きくてしっかりとしていたこともあり、特に危険は感じなかったということです。ですので、転覆することがあるかもしれないという認識はありませんでした。

Q3 どうして安全に陸に帰れると思ったのでしょうか。その根拠は何でしょうか。「荒天になれば引き返す」の言葉だけで、安全だと思ったのでしょうか。また、天候が悪くなるということを知っていましたか。知っていたなら、無事に帰れるという事と矛盾していませんか。どのような項目について安全が確保されたと言う認識に至ったのか、感情論ではなく事実でお答え願います。

A3 これまでの長い実績の中で、無事引き返すことができなかったという事実は一度も聞いておらず、安全対策についても当然県からの引き継ぎが確実に行われているもの

と信じておりました。また、風向きの関係からですが、カッターボートの進路が岸に沿った東向きのコースをとるとの説明を受けたこともあり、天候が悪くなくても帰ることができるという思いを持ちました。

当日は出航時に雨が降っていましたが、あれほどまでに天候が悪化し、カッター訓練に支障が出るほどの状態になることは予測できませんでした。

Q4 出航後、天候が荒れた場合や、緊急事態が発生した場合は、どのような手立てをするようになっていたのでしょうか。例えば落水の場合、引率の先生方は、どうする事になっていたのでしょうか。

A4 どの艇においてもトラブルが発生した場合は無線でキャプテンに連絡をとり、その指示に従うことや、必要があればレスキュー艇を要請することを確認していました。

落水した場合の対応としては、乗船前に所員から、すべての生徒と引率教員に対して、ライフジャケットの襟をつかみ、静かに上を向いて浮かんでいるようにとの指導がありました。その場合も、引率の先生は無線でキャプテンに連絡をとり、その指示に従うようにとのことでした。

Q5 学校行事である以上、管理・監督の責任は校長にあるとしていますが、カッター訓練の最終の実施判断は、誰が判断する事になっていたのでしょうか。現地にいた校長だとすると、どの段階で何を根拠に安全だと判断し、実施を決めたのでしょうか。(注意報が出ていた。三ケ日が大丈夫だと言っている。その情報から実施と決めた根拠は何ですか。)

A5 三ケ日青年の家からの文書には、「荒天時の実施・中止の決定は、団体責任者と相談のうえ所員が行います。」となっています。

当日は雨が降っていたので、学校側は三ケ日青年の家側にカッター訓練の実施について相談を持ちかけ、所員から「この程度の雨なら大丈夫です。」という回答を受けました。この所員の判断に加え、出航当時の風や湖面の状況、学校が注意報発表を知らされていなかったことなどから、学校から三ケ日青年の家に対して、カッター訓練の中止について検討を持ちかけるという判断には至りませんでした。

Q6 情報収集に当たっていた校長は、自ら警察や消防の方に自分が校長だと名乗ったのでしょうか。また、校長はいつから重度のうつ病になったのでしょうか。現在も重度のうつ病で聴取できないとの事ですが、医師の診断書を頂けないのでしょうか。また何級か障害の級はあるのでしょうか。いのちを落としたという重大な調査に関する事として、情報としては一番重要な人なので、聞けないのであれば、医師の診断書がないと納得できません。

A6 校長であると名乗ったのかどうかにつきましては、現段階では水野校長に聞き取りができず、確認できていません。

障害の認定を受け「級」があるかどうかにつきましては、現在治療途中であり、障害者手帳を所持する状況ではありませんので、障害の認定は受けていないとのことです。

医師の診断書の提出について白井前課長から水野元校長の奥様にお問い合わせをいたしました。

ところ、主治医と相談のうえ、翌日に返事がありました。それによりますと、主治医からは個人情報に関わる内容であるため、提出については差し控えさせていただきたいとのことでした。

Q7 自主艇について、事前に先生方の非常事態の対応に関して、何か安全教育があったのでしょうか。経験もない先生方2名だけの自主艇でも安全だと判断した根拠は何でしょうか。

A7 安全教育につきましては、乗船前の指導の中で行われました。何かトラブルがあった場合は、無線でキャプテンに連絡し、指示を受けるということでした。また、どうにもならない場合にはレスキュー艇が救助に来るとのことでした。専門的な経験のない教員2名での漕艇指導ではありますが、とにかくキャプテンと連絡をとり、その指示に従うことと、三ヶ日青年の家のレスキュー体制を信じていました。

また、4艇のうち2艇は教員（引率者）だけが乗船する自主艇となることは、静岡県が直接運営している段階から決定していたことであり、章南中学校も他の利用団体と同様に、それに従いました。

Q8 C艇に乗っていた生徒が「花菜がない」と訴えていたとの情報がありますが、その生徒が訴えた情報は、誰から誰にどう流れたのでしょうか、もう一度調査して下さい。消防あるいは警察の誰に伝えたのでしょうか。

A8 山川教諭は、転覆したC艇の生徒が、「花菜と万里奈がない」と叫んでいるのを聞いたそうです。そして、レスキュー艇に引き上げられたときに、所員に「まだわからない子がいる。」と伝えました。（その時には、「花菜」、「万里奈」という名前では言わなかったと思うとのことでした。）その言葉を受けて、檀野所長は湖へ飛び込み、C艇の艇内から生徒を救い出してくれたと聞いています。ただ、山川教諭はその救出場面を確認することなく、所員の運転するレスキュー艇で青年の家に運ばれてしまったので、所長によって誰が救助されたかは確認できませんでした。

16時ごろに青年の家に救出された山川教諭は、まず、校長に、続いて養護教諭に「花菜さんと万里奈さんがいない。」ということをお伝えしました。そして、青年の家に停車中の救急車のそばで健康チェックのためにいた40歳代と思われる消防署員にも「花菜さんと万里奈さんがいない。」ということをお伝えしています。その後、青年の家に移動した山川教諭は、館内で警察官や消防署員を見かけるたびに「花菜さんと万里奈さんがいない。」ということをお伝えしたということです。なお、このことを伝えた警察官や消防署員の名前等は特定できないとのことでした。

C艇から3人の生徒を救助した檀野所長は、救助に来た水難救助隊の隊員に、まだ艇内に残されている生徒がいるかもしれないから確認してくれと訴えましたが、水難救助隊員からは潜水用の装備をしてきていないので、水に潜って確認・救助することはできないと告げられたと聞いております。